子どもの差違と教育

牛島義友

同じ四月に入園したり入学してくる子どもたちも、その生れ月によって、身心の発育状態が非常に相違するのはあらためていうまでもない。

この年令での六か月のちがいは、中学生の一年の相違に相当する。このようなちがいは結局、生れてから後の月令がちがうのであるから当然であり、またやむをえないことである。なお、年少幼児の場合はただ月令が問題だけでなく、生れた月すら、身心の発達に影響する。例えば、早春に生れた子どもは、わりに発育はいいが、夏期に生れた子どもの発育はすこしはおくれる。これは身体運動が活ぱつになる六、七か月の乳児の時に、前者は、うす着で自由に運動ができるが、夏生れの子どもは、ちょうどこの頃に着物でいくえにも、まきくるまれるために、自由な運動が阻害される、それが発育に影響する。

もっともこの点からいえば、月令のすくない、はや生れの子どもに発育を促進さし、おそ生れの子どもの発育を、多少よくせいしているので、両者の差をいくらかちぢめることになるかもしれない。

この早生れと遅生れの子どもの間に発育の差があることは事実である。しかし、これを教育の面から考えた場合は、ただその差を強調し、できれば生れ月によって組わけをした方がよいか否かという問題になるとそう急な結論は下しかねる。

多くの小学校では、早生れ、おそ生れを考慮して新入生の組分けをしているようである。また、イギリスでは、小学校

の入学を一年の内の一つの時に定めず、年に数回入学の機会をこしらえている。これはただ月令だけによって分けるのではなく、子どもの個人差を考慮して適当な時期に入学させるのである。

できるだけ一クラスの生徒たちの能力をそろえたいと思うのは、主として、教える者の側からの要求である。学力がちがう場合に教えにくいのは確かである。しかし、能力のちがいだけからいえば早生れ、おそ生れのちがいよりも、個人差の方がよっぽど大きい。生活歴の点からいえば、せいぜい一か年のひらきがあるだけである。しかし精神年令の点からいえば、幼稚園児でも、三、四年のひらきがある。五才で入園してくるもののなかに、少し発育の弱い子どもは、精神年令が四才に達しない者もいるのに対し、七、八才の子どもに相応するような子どもも少なくない。したがって、もし能力別編成をするというならば、生活歴で分けるよりはむしろ知能検査などの結果によって分けた方が賢明である。

しかし、このように園児や生徒たちの能力をそろえることに努力する前に、幼稚園や学校の本来の使命を考えなければならないことである。幼稚園は家庭の延長であり、家庭的な要素を多分に保持しているのがのぞましいといえる。また理想的な学校は、社会の縮図であり社会に近似した場面においてのみ、よい社会人が育成される。

われわれの家庭の中には、双子の場合を除いては、等質的な家族は存在しない。生産力のゆたかな父親や、全然生産能力が欠けるのみならず生活能力さえよわい乳幼児も、一つの家庭の中にいて生活している。ここでは能力に応じた役割のちがいが重要な要素となって一家がまとまった生活をなしている。

社会や職場でも同様である。同じような能力がかたまっているのは、巨大な事業場における特殊な職場ぐらいである。若い作業員を集めて電気製品を組み立てる工場などには、同じような年令能力の人がたくさんいる。しかし多くの職場には、男女、年令、学歴のそれぞれちがった人々がたがいに役割を異にし、おぎないながら生産活動をしている。ここで必要なことは、それぞれの能力経験に応じて役割が付与されることであり、その役割をみなが忠実に守ることである。

このような家庭や社会のことを考えると、等質的な学習集団は、むしろ非常にかわった別世界である。ここでいかに教育されても、その人が家庭にかえり、職場に入っても、よい家庭人であり、よい社会人になる保障は得られない。家庭の

ような、あるいは社会のような学校においてこそよい社会人は育成される。

等質的な集団においては教師と生徒との関係は、割に単純である。全生徒を、せいに先生の思う方向にひきずることもできよう。しかし、生徒自身の中での社会つくりや集団関係は、かえってむつかしくなる。協力的なものよりも相互の競争と排他的な傾向になりやすい。

これは少し不適当な例かもしれないが、私たちの精薄者のコロニーで経験したことである。S君は精神年令がまだ三才に達しないが年令も七才ぐらいであるので、皆からかわいがられマスコットのようにされているお子さんである。一人で遊ばせているかぎり何も問題はない。ところが、この子がY先生の四つになる坊ちゃんと出合うと、どうもぐあいが悪い。S君にとっては、この坊ちゃんが自分と能力の接近したものと感じるらしく、がぜん、競争的となり、三輪車をうばいあったり、はげしいけんかをはじめる。相手の髪をむしり、顔をきずつけるようなはげしいけんかで、おとながとめてもすきをみては、かかっていこうとする。

このような例は子どもに接する人の常に経験することであろう。兄弟げんかにしても年令の接近したものにおこりやすいのであって、年令が広くはなれたり性を異にした場合はけんかよりもむしろ、むつましい間がらになる。学校の学習の場合においても、学力の接近したものほど競争的になる。表面では仲よくしていても内心、相手をけおとしてやりたいという闘志にかりたてられている。今日、戦後に急増した子どもたちが高校入試をめぐってはげしい競争や相互の中傷で性格がゆがめられていることは、しばしば指摘されていることである。等質集団は性格形成に必ずしも望ましいものではない。

異質集団ではむろん、強いもの頭のよいものが上になり、他がそのけらいとなるような関係ができてくる。この大将やリーダーがいることが何も悪いことではない。家庭や社会において家長や上役がいるのと同じである。大切なことはよい指導者をつくることであり、また、集団の中で自分の力に応じた適当な役割をもたすことである。権威的指導者のかわりに民主的指導者あるいは公僕的な、弱い者を助けることにほこりをもつような人間に育てていけばよい。またグループの構成を配慮して、できるだけ多くの子どもに指導者としての機会をあたえるとか、学年の変りの時に上のものが卒業して、次の者が指導者になるようなしくみにしておけば、劣等感が

発生することも少ない。同じ子どもが新入児、補佐役、指導者を経験していくことが指導者としてのよい訓練にもなる。

また、このような非等質的な集団の方が全体が一つに協力することができる。競争心はもっぱら他のグループと対抗さすようにもっていくとよい。一つのクラスの中をことさらに性や能力あるいは年令を異にした小集団に分け、この小集団を互いに競争さすならばグループはますます結束する。この場合に小集団の中に指導者が二人できると、かえって分裂する。イギリスのパブリック・スクールでは学年別のクラスの他に、たて割りにしたハウス・システムがもうけられている。新入生たちは学校の中にあるいくつかのハウスに分属させられるが、卒業するまで同じハウスに属している。このハウスは寄宿舎になっていることも多いが、ここではハウス・マスターを中心として上級生下級生がいっしょになっている。体育やクラブ活動の場合は、このハウス単位で互いに競いあっている。このようにこの一つの学校や幼稚園をたて割りに編成するということも意味のある分け方ではなかろうか。

しかし、このようなたて割りでは、学習には都合が悪いと反対される。画一的な学習指導には確かに不便である。しかし能力に応じた指導や個性に応じた指導には、この方法の方がかえってよい。個性教育が問題になるときは、よくクラスの生徒数が多すぎるといわれる。確かに、四、五十人の子どもを一人の教師が教育するのはむつかしい。しかし二十人にへらしてみたって個性教育はできない。おそらく四、五人の子どもにしないかぎり、一人ひとりの子どもにいきとどいた教育をするのは不可能であろう。しかし小集団に分けた場合にはそのリーダーが教師の手助けをすることができる。昔の寺子屋においては、ひとりのお師匠さんのもとに年令や学力のちがった子どもたちが一しょに教育された。年長のものがお師匠さんの代役をすることによって、案外いきとどいた教育ができておったし、また、このように人に教えてみることは学習にマイナスになるどころか、正確な知識を身につけ反省的な態度で学ぶので一層よい経験である。

このように性格形成や学習の点から考えても、わざと異質的集団を作ることに積極的な意味が考えられよう。このような点から考えて私は、能力差とか性別、あるいは早生れ・おそうまれなどの差異点を強調し、それにそくした教育を主張するのに賛成しかねる。むろん、この差異点を無視するわけでない。そのちがいをとり入れ、それぞれのものに、ところを得さす新しい社会的教育を持たしたいものである。